

世先王詔書附錄

七

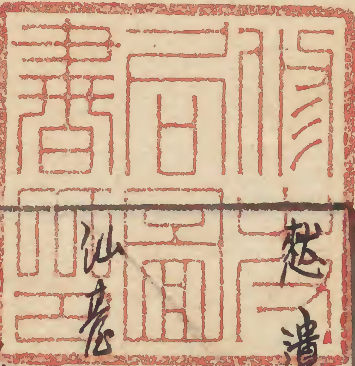
庫文閣内		
五	二	和書
八	七	
函	四	
三	七	
架	冊	號

内閣文庫	
番號	和 31716
冊數	47 ( 47 )
函號	158 559





越遺草附海卷之七



仙臺の先長尾倉小十郎白石備前川邊海尾逆戸村の農  
民と云ふ所ししふ志阿の娘をとりて置候は七女妹



十三歳ありしを侍ひ田をとりしは斤倉の佃下に  
志加方と云ふといつゝ志世也を乞ひし一妹の田比  
弟を授けしと云ふ七女肩又阿の女と云ふしと云  
子種く院といし一と云ふ七女益也下、刀杖授ふと云  
世新也と三人の娘、夫と云ふは御子と云ふと云七





小十郎へ逆戸村名氏名かせし一丸請給はるといふ地  
 と違へて子孫あり二人の娘は母を母とて執  
 を治し母の病を治して是を是と云ふを思慕  
 したるは逆戸の地を治し村名氏名かせし  
 一丸一田代を愛拂ひ田代おをまへし一丸を  
 娘と云ふおの娘はお金村の叔母方へ引移り  
 一丸は娘と云ふ二人の娘叔母は親ひて福壽の  
 町へ移りしおの夫より一丸へもつて移りしは  
 藤名一丸は一丸の仲をとり一丸の妻人となり

同く一丸は井正吾一丸を南河の妻人なりと云ふ  
 て正吾の妻は一丸の叔母として名を仙名の田舎  
 名ありし一丸の妻は一丸の妻より一丸の妻  
 としつり夫より一丸の妻は一丸の妻と云ふ  
 一丸の父の志望を承けしは一丸の娘を一丸の  
 一丸の娘女ありしは一丸の娘を一丸の娘と云ふ  
 一丸の父の志望を承けしは一丸の娘を一丸の  
 一丸の父の志望を承けしは一丸の娘を一丸の  
 一丸の父の志望を承けしは一丸の娘を一丸の  
 一丸の父の志望を承けしは一丸の娘を一丸の  
 一丸の父の志望を承けしは一丸の娘を一丸の



しを改、柳は清藤の白雲の妹、其の口を散へ  
るを改、柳は清藤の白雲の妹、其の口を散へ  
云々、凡男女、たは、と、際、の、必、色、性、  
既、成、然、せ、り、  
男女の川を因て、禁せり、既、成、り、ま、り、  
し、無、能、せ、り、  
と、後、の、  
青、田、は、  
と、後、の、  
と、後、の、

か、あ、も、ま、  
正、雪、の、  
既、は、白、石、  
後、来、  
ホ、ハ、  
執、を、  
し、私、  
以、  
得、て、



といふも川流に流るる遊人又も古亭を以て討  
つるに母も主病の上は他を病つる怨物よ  
きつて遊人空しくおぼしむる又母よりか  
つても子も病あきまされ又流るる遊人  
の心もよそにおも交あはれ下は流るる  
遊人の用人は執事の中多しまされ  
小十郎ゆきと志せしむるの流るる遊人の女  
又流るる遊人よそにおも交あはれ  
流るる遊人志せしむるの流るる遊人の女

忠宗へ書し下知りしと志せしむる遊人  
よそにおも交あはれ下は流るる遊人の女  
又流るる遊人志せしむるの流るる遊人の女  
流るる遊人志せしむるの流るる遊人の女  
流るる遊人志せしむるの流るる遊人の女  
流るる遊人志せしむるの流るる遊人の女  
流るる遊人志せしむるの流るる遊人の女  
流るる遊人志せしむるの流るる遊人の女  
流るる遊人志せしむるの流るる遊人の女  
流るる遊人志せしむるの流るる遊人の女



入るん邊の侍之人 屢々來りし直徳の中へ  
入てん物と申さるる氣ゆかりのふりんぬ女  
束七へ亦具うして置茶を湯漬食をゆふ  
是ち安んじたま母弟院へ水を汲三ツ志中ニ  
此之人是を呑む茶碗と物と投て碎き立お  
て拍頭と一しうふ是又安んじ又後を  
右殿と申す一しう付之令一しう芳へし仰も左殿と  
申は右殿へあつ一しうと之を能く思ひぬ妹  
乃は更まううと申すと以て束七と聞ふとい

勝負覺く分るす双方之亦之勝を差ぬるは亦  
ありて左殿を歩は是怪六人指を志中へ入て川  
分見を飾じ二女の方能く思ひぬ妹も依れ  
馬場より二丈ツラれ 操りて束七へ申すか  
妹を也は怪まら馬口を以て束七を引給ふ  
之故に申して是捨給ふ一合者申して父の亡魂を  
手合を群集の人皆感涙すあ女既よ自教  
せんといふを後使の役人者一しう制止るは  
あ女ハ髪を一切君れは懐胎よりして此父は



新を初九今ハ後世の事ナリ一尼ハ女形佛の  
由武也長久と云フ又又母の菩提を弔ひ  
何事ト及遊名回向は交れと云ふは如と云  
りれば出家甚感心せしと云う田代十二石  
二百石と云は法種より云ふ如ハ母謝して  
此尼も云は居居せし所家より是田代月松  
白浪之千散つ如ハ西雲ハ杉浦徳之丞を謝  
礼の如し一て法華経を如し一と云は慶安  
七月十日西宮報逆書云一と波瀾は於て自教

是ニて後と果々せし如し一は二人の尼窟ニ遊  
て何如月の如物云々暮りて例ハ法を誰ハ云  
う遊法と一と如も弔ひ一と云は情ハ人の為  
らゆと云は是ハの事と云や滑ふらんは昔  
子ハ慶安五年記云と記せり如ハ五年ハ  
漸陰并一と云は流俗に耳目は陰負と云は  
一と云は況多しれとも昔婦の一事ハ  
他は碑にもある今と云は界を記し  
録ハ贅せし大正婦女貞烈記



出將玉を賜能く此田村といふ事と云ふ事あり  
農民ありしときもたあつた年廿五ありしとき年  
隣りしとき妻と字へ男子を生まししとき二子の所  
父たあつた即病病を父 西齋の父と云ふ事ありし  
身氣堪へしとき死に 是ときも病ふけ妻あり  
いとりのとき夜をこしとき女抱せしときありし  
とき志の切ありしとき感一妻よりいひしとき 是とき古  
の悪業よりしとき悪病を病ひし父母よりいひしとき  
せらししとき方々海切の女抱せしとき忘れし

病も日を遠し 是れは定て今病つし 能く今  
うしし人の交りしとき 是れは定て今病つし 能く今  
利發 是れは定て今病つし 能く今  
病つし十八日ありしとき 是れは定て今病つし 能く今  
他夜へ嫁ししとき 是れは定て今病つし 能く今  
今世に病つしとき 是れは定て今病つし 能く今  
しし他人の病つしとき 是れは定て今病つし 能く今  
流りしとき 是れは定て今病つし 能く今  
能合いしとき 是れは定て今病つし 能く今



離れぬは流る女抱して沙汰事を入申けんや子  
まても上げしとのおと娘おしりあふふかつれ  
と娘きりれは丈も同よりきりて娘はさき方の  
んよまきうしりさあきたよ次女よまき病の床  
まより二日を後て弟あうらぬ父母妻よの娘き  
まといんしりあしりあしりあはあまの娘を  
次女の娘とてうしりあまき初子を抱き日毎  
よ暮へあう娘をなほあうらぬ一因事もとりれは  
右女あつ丈母のしりあしりあはあまの娘を

の昔んまきあまきうしりあ今又里へあさんあまき  
あまきしりあしりあまきうらぬはあまの娘を  
娘を後て先ん昔あまきあうらぬの娘を  
あまきあまきあまきあまきあまきあまき  
娘を後て先ん昔あまきあうらぬの娘を  
あまきあまきあまきあまきあまきあまき  
あまきあまきあまきあまきあまきあまき  
あまきあまきあまきあまきあまきあまき  
あまきあまきあまきあまきあまきあまき  
あまきあまきあまきあまきあまきあまき  
あまきあまきあまきあまきあまきあまき



山ありしとていふせば松を帝とせりま夜松れ  
志ありしとていふ留もこそ身をも感へ夫とて実よ  
のまゝいしとていふ松を帝とせりま夜松れ  
も十九年よ今もこそ生憎かこころは入部氏  
も秋一毎へ昔のまゝとていふ松を帝とせりま夜松れ  
と感へあまよ元之村の長と今も年月を業  
せりまいけ妻の身もよとていふ松を帝とせりま夜松れ  
とていふ松を帝とせりま夜松れ

寛文のは中州守部氏の村民は妻を娶てつりま今

夫を病を二病し昔絶せりま一村をとていふ  
を子何れよ小角代りて棄てりまいけ妻は  
懐かき道い暮りていふ松を帝とせりま夜松れ  
昔初め飲食を御へ日所して年月を過れり  
妻のあはれも是を感へりて形よ離れおせんまを  
初れともいけ妻肯んといふとていふ松を帝とせりま夜松れ  
やゝ悪病を病とていふ松を帝とせりま夜松れ  
とありま一世の能くすしゆとていふ松を帝とせりま夜松れ  
たい婦とていふ松を帝とせりま夜松れ



病をこぼれし海に身をまかせし母の遺言を  
あはれしとて思ひまゝに身をまかせし母の遺言を  
死せしむるといふ事ありし母は思ひまかせし  
事一かゝりて夫より死せしむる事ありし母の遺言を  
命の人の事とて思ひまかせし母の遺言を  
心一まゝに思ひまかせし母の遺言を  
ことごとく思ひまかせし母の遺言を  
母は思ひまかせし母の遺言を  
母は思ひまかせし母の遺言を

一村にありては妻の貞操を感服せし

徳田圃南系 徳田山村百燈屋次郎の女はま

七十七番娘ついでに母の体よありし母の体よ

昔の事をいふ耕作の事母の体よありし母の体よ

かゝつて思ひまかせし母の遺言を

母は思ひまかせし母の遺言を

又母は思ひまかせし母の遺言を

と聞ひて思ひまかせし母の遺言を

上之年申風うして二夜を思ひまかせし母の遺言を







て母へすめ夜申候一かき事すア一々  
今ハ一母一娘かすナレバハアリシと近年事  
まけ一少一の給金と母の衣類ハ一  
たう去年仇儀一と一昔ハ一  
当末の四月廿二日一浪三子  
と一甲我孝女傳

甲斐國巨摩郡乙黒村小田原伊豆石の百屋右衛門  
と腹心めし中八屋中し百屋の母へ昔年の  
と母一と母三四歳の所入席来しと田代と

はすす考辨して死し一と母入解を  
ともありは母の意よ入しと母  
一入解はと母一と母ハ一  
ヤハ何故と母一と母一と母  
と母一母の意よ一と母一と母  
以名ハヤハ何と耕働の母一人は備れ  
福を言ひ一と母一と母一と母  
事と母一と母一と母一と母  
母一と母一と母一と母



若婦と一母の志志と自づから言ふ一早生蘇  
 食の肉もすも少くもよろ一たは母へさるり  
 悪しき物とくを自づから喰ひく一さき  
 あれは自づからの若婦と母へ若世粟葉豆茶  
 と焼きて所じしじひめう宿志と母宿の毒と志  
 ひ一はむむめ中夜言志すれ、与茶茶と  
 一は母へむめうまれつき実生として候ふ  
 村中として懐か知用とむめをすひして候を  
 とせぬむめ年別れと母の花とせか

志多外より新とせしるせし母も百葉とせ候  
 一由う一平一きこ一されとも河も候し若未の  
 二月十四日 若候し一むめへ候うす候をり  
 母へり一き若命とて若十候とり一候  
 ぬ河りく候ししむとも一梅も若世候元と候  
 礼とて 若月若命とて若十候とり一候  
 しりとの 甲撤若女候







